

（雨夜の品定め…左馬の頭の女性論の一部からどうぞ）

「…容貌が悪くなく若々しい年ごろの女性でね、自分自身には悪い評価が下らないようにと、十分注意して手紙を書いてい  
るらしいのですが、実際にはなかなか大らかに言葉を選び、墨  
も微妙に薄くしたりして、男の興味を引いおいて、もう一度はつ  
きりと見てみたいなあと、ひたすら待たせた上に、いぎ、わず  
かな声を聞きとれるほどに言い寄ると、まるで息の下に引き入  
れるかのように言葉少なになるような人がね、こういうのが本  
当に上手に自分の本性を隠すんですよ。これは上品ないい女だ  
と思つて、こちらもその気にさせられて、それなりにもてなす  
と、いきなり本性を表す、これこそ女性の第一の欠点とすべき  
でしょう。

女性の仕事の中で、いいかげんであつてはいけない夫の世話  
という意味では、風流を知りすぎて、ちよつとしたことをつい

でに感動したり、趣味に熱中してしまうというのは、なくてもいいと思われれますな。でも、かといって誠実さばかり際立って、いつも髪の毛を耳に挟んでいる主婦が、ひたすら生活くさい世話ばかりをしているところですよ：旦那が、朝夕の出勤や帰宅のついでに、仕事やプライベートでの他人の様子とか、いい話、悪い話で、目や耳に止まったことなどを、どうせ分かりつこない相手に、どうしてわざわざ話そうと思うでしょうか。話しませんよね。

身近にいる妻が聞き分けよく理解してくれるだろうと思うと、早く会って話したくなつて、ついその時のことを想像して微笑んでしまつたり、涙ぐんでしまつたり、あるいはわけもなく腹立たしくなつたりして、自分一人の心には納めきれないことなんかが多いんですよ。でも、いったい誰に聞かせりゃいいんだ、と思うと、自然と妻に背を向けてしまつて、ついわびしい思ひ出し笑いをしたり、「いやあ」などつついつい独り言を言ってしまうんですが、またそんな時に「何ですかあ」などつつまらなそうな様子で見上げて座っているなんていうのは、どれほど

がっかりさせられることでしょう。

ただひたすらに子供っぽく、おっとりしているような女性を、何とか育て上げて結婚するというのは悪くないですね。頼りなくても直しがいる気がする。本当に目の前で会っていると、その可愛らしさに、欠点も許しちゃおうと思えるんですよ。しかし、夫が離れている時に、当然連絡すべきこともせず、その時々には済ませなければならぬこと、それがつまらないことでも、大切なことでも、とにかく自分の判断でしなくてはと思うことがなく、深い思慮がないような女は、まことにがっかりする頼りにならない罪な奴で、やっぱり困り者ですな。反対に、いつもは少しよそよそしくて気に入らない女性でも、何かの折に意外に見映えのするようなことがあつたりするんですよ

ね」

などと、すみずみまで知り尽くしたような物言いでも、結論は決めかねて、ひどくため息をついています。

「今はもう家柄は関係ありませんね。顔形についてもとにかく言いますまい。あまりにもがっかりするほどひねくれた感じ

さえなければ、ただ一途に誠実で静かな心の持ち主である女性を、終生の伴侶に決めるべきですよ。そのほか、才能、性格の良さが加われば幸いだと思つて、少しくらい欠点があつても、あえて高望みはしますまい。安心していられて、おだやかなところさえしつかり持つていれば、表面的な気立ては自然と身についてくるものですよね。

上品になんとなく気を遣つて、恨み言を言つてもおかしくないことでも知らぬふりで我慢して、表面は平静を装つたりして…それでも心に思い余つた時は、言いようもないほど美しい言葉で悲しげな和歌を詠みおいて、思わず思い出さずにはいられないような形見を残してね、深い山里とか、人里離れた海辺なんかにはひっそりと隠れてしまつたりするんですよ、そんな女性…。

まあ私がまだ子どもでございました頃ならね、出入りの大人の女性たちがそんなような物語を読んでいたのを聞いて、本当にじくんと来るほど切なく愛情の深い話だなあ、と涙まで落としていたものですよ。しかし、今思うと、それはずいぶんと軽

率でわざとらしいことです。愛情が深い男を残して、いくらその時に辛いことがあっても、人に魂胆がばれないように逃げ隠れて人を惑わして、男の心を確かめようとするわけで、そんなことをしている内に、長く気まずい思いをするなんていうのは、本当につまらぬことですよ。『愛情が深いのですね』とかほめられたりして、感情的になってしまおうと、きつとそのまま尼さんになってしまいますよ。出家を思い立った時は、本当に心が澄んでいるような気がして、この世をかえりみようとも思わないものです。『いやまあ、切ない。こんなにまで真剣に考えていたのですね』なんて知り合いが来てなぐさめたりしてね。そんな様子を、それほど女のことをいやだとは思っていない男が聞きつけて涙を落とすと、またそれを見て、女の召使いや古参の女房たちなんか『旦那様のご本心は誠実でございましたのに、出家などなきつて：』などと言う。自分で前髪を掻き上げようとして髪がないのに気づいて、空しく心細いものだから、ついつい暗い顔になってしまおうのですよ。こらえていても涙がこぼれてしまうので、ことあるごとに我慢しきれず、後悔する

ようなことも多いみたいですね。きつとそんなことだと、仏様もかえって心が汚いと御覧になるに違いありません。俗世間の汚れに染まっていた頃よりも、中途半端な悟りではかえって悪の道に漂ってしまうように思われますね。縁が切れないという運命の浅からず、女を尼さんにしてしまう前に男が探し出したとしても、すぐに女の出家未遂という思い出が憎らしく感じられることがないでしょうか。ありますよね。良くも悪くも連れ添って、お互いにいろいろなことがあった時も、見過ごしてあげるような間柄こそ、契り深い本当の夫婦と言えるのでしょうか。やたらと家出したりすると、自分も相手も心配で、ついつい気疲れするようなことはないですか。

それから、軽々しく浮気心を抱いた夫を恨んで、態度に出して反抗したりするのも、これまたばかげたことですよ。心は他の女に移ることがあっても、一緒になった頃の気持ちを大切に思えば、生涯の伴侶と思えることもきつとあるでしょうに、そのようないざこざから、夫婦の縁が切れてしまうこともあるのです。

全てね、どのようなことでも心穏やかに、恨むべき夫の浮気を理解あるようにほのめかして、恨み言も憎々しげでなくそれとなく言えば、それによつて、男の愛情も一段と増すにちがいないですよ。多くはね、自分の浮気心も妻の態度によつて収まりもするでしょう。かといつて、あまりやたらに手綱を緩めて放任しておく女というのも、一見気遣いがいらぬし、かわいらしくも思われますが、そんな女はいつのまにか男に軽く思われるものなのです。繫がない舟が浮いているという例えもありますが、本当にいいことはない。そうではございませんか」

と言うと、頭の中將はうなづきます。

「さしあたって、かわいいとか、いとしいとか思つて気に入っているような人が、信用を裏切るような疑いがあるのは大ごとでしょう。自分の心に間違いがないのだから、見過ごせば相手も気持ちを入れ替えて添い遂げないこともないだろうと思われませんが、実際はそうとばかりも言えませんまい。ともかくも、仲がうまくいかないようなことがあるのを、落ち着いてじつと堪えるよりほかに、良い手段はないようですなあ」

と左馬の頭が言うのを聞いて、頭の中将は、自分の妹の姫君がこの結論に当てはまっていらっしゃると思うと、源氏の君が居眠りをして言葉をさし挟みなさらないのを張り合いなく不満に思います。左馬の頭はまるで女性の品定め博士のようになって、語り続けていました。頭の中将は、この演説を最後まで聞こうと、熱心に受け答えしながらお座りになっています。

中將は、

「わたくしは、おろか者のお話しをしましょう」と言つて、

「本当に秘密で会い始めた女がおりましてね、そうした関係をそのまま続けてもよさそうな様子だったので、まあ長続きするものとは存じられませんでした、馴れ親しんで行くにつれて愛しいと思われてきましたね、途絶えがちなながらも忘れられない女だと存じておりましたところ、深い仲になってみると、向こうもわたくしを頼りにしているようにも見えたのですよ。頼りにするとなると、恨めしく思っていることもあるだろうと、我ながら思われる折々もございましたが、そんな時もその女は

見知らぬふうをしましてね、こちらが久しく通って行かないのを、こういうたまにしか来ない男なのだど割り切ってしまうでもなく、ただ朝夕にいつもがまんをしている態度に見えて、気の毒に思えたので、ずっとわたくしを信じていてくださいと言ったこともあつたのですよ。

親もなく、とても心細い様子で、それならわたくしこそをと、何かにつけて頼りにしているらしい姿も可愛いものでした。わたくしも女がこのようにおっとりしていることに安心して、長い間通って行かないでいたころ、わたくしの妻と思われるところから、無情なひどいことを、ある人を通じてそれとなく言わせたということ、後になって聞いたのでした。

そのような辛いことがあつたとも知らないで、心の中では忘れていないというものの、便りなども出さずに長い間おりましたところ、ひどく落ち込んで不安になつたのでしよう、幼い子供もいたために思い悩んで、撫子の花を折って、送って寄こしたのです」

と言つて涙ぐんでいます。

「それで、その手紙の文句は」

と源氏の君がお尋ねになると、

「いや、特別なことは何ありませんでしたよ。

』たとえ卑しい山人の家の垣根は荒れようとも

時々はかわいがってやってください撫子の露を』

思い出したままに行きましたところ、いつものように純粋なようでないながら、ひどく物思い顔で、荒れてしまった家に露がぎつしり付いているのを眺めて、虫の鳴く音と競うかのように泣いている様子は、昔物語めいて感じられましたなあ。

『庭に咲きまじる花はいずれも皆美しいが

やはり常夏の花に勝るものはないように思われます』

大和撫子、つまり子どものことはさておいて、まず『塵をだに』の歌の心などで、親の機嫌を取ったわけです。すると女は、

『塵を払うべき袖も涙に濡れてしまった常夏に

さらに激しい風の吹きつける秋までが来てしまいました』

ときりげなく言いつくろって、心からわたくしを恨んでいるようにも見えません。涙をもらし落としても、とても恥ずかし

そうに気を遣って紛らわしたり隠したりして、わたくしの薄情を恨めしく思っているということを知られるのが、どうにも辛いことのように思っているようなので、わたくしが気楽に構えて、再び通わず、放っておきましたうちに、なんと女は、跡形なく姿をくらましてしまったのですよ」